

時 論
新 論
理 想 論

民博シンボルマークのひみつ

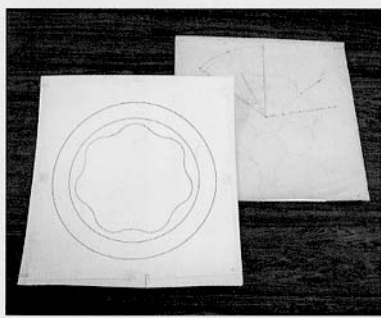
山本 泰則

(やまもと やすのり)

本館文化資源研究センター

「国立民族学博物館十年史資料集成付録」(一九八四年)にはシンボルマークの詳しいデザイン図面が収録されているが、それを見ると花びらの形は少々複雑だ(図1)。たとえば直径二九センチメートルのマークを描く場合、まず中心に半径三・五センチメートルの円Aを置く。それに接するように周りに同じ大きさの円Bを等間隔に七つ並べ、さらに、重なり合うふたつの円Bの両方に接するように、半径五センチメートルの円Cを七つ置く。最後に、円

本誌の読者は民博のシンボルマークの形をよくご存じに違いない。輪のなかに花びらのような波打つ円を配したこのマークは、民博創設の三二年前、勝井三雄氏によってデザインされた。
シンボルマークは、地球とそのなかに躍動する世界の諸民族をあらわそうとしている。五大州と二大洋が力強い円に囲まれて内部でエネルギーが発酵しているような、全地球人の協同、地球共同体などのイメージだという。そして色のブルーは文化をあらわしている。



本原稿執筆中に見つかったシンボルマークの原図面

先曰、このマークをパソコンで描く必要にせまられた。使ったのはポストスクリプトという一種のプログラミング言語。線分や円弧を描く命令をひとつひとつ組み合わせてパソコンの画面やプリンタに図形を作りだす。実際に描いてみたところ、なぜか花びらのカーブの継目にトゲのような段差ができてしまった(図2)。初めプログラムのミスが計算誤差が原因かと考えた。しかしよく見ると、円Bに接するはずの円Cが、わずかながら離れている。

ふと思いついて、円Cの中心位置を計算しなおしてみた。デザイン図面の指示では、円Cの中心点はマークのいちばん外側の円周から六分の一(約〇・二五六)センチメートル内側にある。しかし計算

と円Cの縁をなめらかにつないで、この微妙な波形はできあがる。

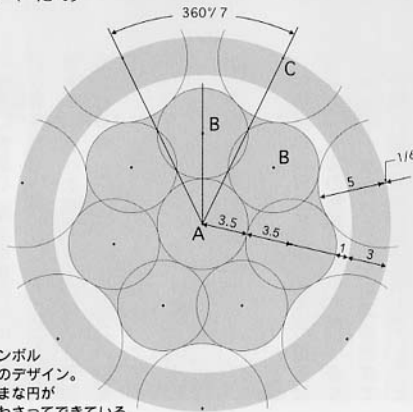


図1
民博シンボルマークのデザイン。さまざまな円が組み合わさってできている

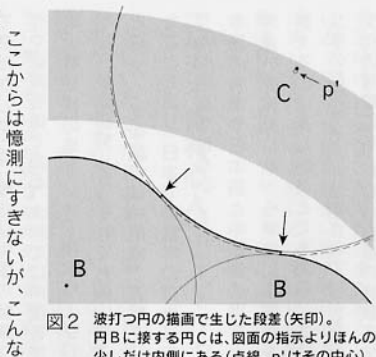


図2
波打つ円の描画で生じた段差(矢印)。円Bに接する円Cは、図面の指示よりほんの少しだけ内側にある(点線。p'はその中心)

してみると、内側に入る量は約〇・二五四センチメートルになった。
この差〇・八八ミリメートルはどうして生じたのだろうか？ 差はごくわずかで、鉛筆の線幅にして一二本分である。おそらく当時、マークは定規とコンパスで描かれたはずで、その作図誤差なのだろうか？ しかし、たまたまた見つかった図面原図の、鉛筆と製図ペンの精緻な線を見ていると、とてもそうとは考えにくい。そして原図を測ってみると、円Cの位置はわたしの計算とはほぼ一致した。